イラスト・題字：長峯亜里

今年のシリーズ「グローバル随想」はロンドンから。
在英ジャーナリスト小林恭子さんが「英国のいま」を様々な角度からお伝えします。

17年目に入った英国生活

家族の都合でそれまで勤務していた職場を離れ、ロンドンにやってきた当時の筆者を迎えたのは、暗く長い冬だった。朝は9時少し前にならなければ外が明るくならず、夕方は3時半ぐらいには暗くなる。仕事もなく友人もおらず、なかなか明けない夜の空を見上げて涙がこぼれ落ちることも1度や2度ではなかった。

やることがないので積読（つんどく）だった本を読んだり、新聞をながめたり。新聞の英語は文法的には理解できるのだが、なぜあるトピックが重要なのかが分からない。気晴らしにショッピングに出かけると、今度は店員の話す簡単な英語が理解できなかった。筆者は英国に来る直前まで日本の新聞社の英字新聞で働いており、情けないことしきりであった。

いつしか斜め読みができるように

しかし、あり余る時間を過ごすためにテレビを見、ラジオを聞き（意味が分からなくても）、新聞を買い、見出しをながめ続けているうちに、社会の中で何が起きているかが大体分かるようになり、新聞記事の内容もいくつかの単語を拾って斜め読みができるまでになった。「石の上にも3年」というが、まさにその通りだったのかもしれない。

今は現地情報を日本に伝えるジャーナリストとして働いているが、情報収集の作業は仕事なのか、遊びなのか判別がつかないほど面白い。

全てのメディアが権力を監視

長年、英国メディアと付き合っていると、その奔放さ、大胆さ、深さに引き込まれてしまう。

17世紀末、印刷業者を登録制とし、印刷物の事前検閲も行っていた「印刷･出版物免許法」が失効した。これによって、新聞メディアは自主規制の世界となった。各新聞は思い思いの主張を展開し、読者は自分の政治姿勢や社会的背景によってどの新聞を読むかを決める伝統が根付いている。「中立性を維持すべし」とは考えないところが爽快だ。サンやデイリー・メールなどの「大衆紙」は英語がシンプルで、感情に訴えかける表現が多い。読者の気持ちをわしづ